23　江之島之景　司馬江漢

江戸時代中期（十八世紀）
絹本油彩
二六・九×五三・九　一面

司馬江漢（一七四七～一八一八）は、江戸に生まれ、画師を志して初めは狩野派を学び、次に鈴木春信門下の浮世絵師となり、さらに転じて宋紫石の弟子となる。そして平賀源内や小田野直武の画風を学び洋風画家となった、という異色の経歴を持っている。

本図は、江漢が天明年間後期頃から寛政年間（一七八〇年代後半から一七九〇年代）にかけて多く描いた七里ヶ浜図の一つで、富士が見える眺望の一つとして、江漢がこだわりをもった名所であり、画題である。七里ヶ浜に立ち、西へとのびる海岸線の先、左手に江の島、右手には小動（こゆるぎ）岬の断崖、そしてその遠景に富士山が望めるこの場所は、青空のもと、海浜に心地良く打ち寄せる白波の音を聞きながら、心地良い時間を過ごせる彼のお気に入りの場所であり、構図であったのであろう。手前の砂浜に佇む漁師の視線の先には富士山があり、その姿には自身を投影しているかと考えられる。手際よく施された絵具、無駄のない簡潔な描写は、江漢がとらえた実景からの雄大さと爽快さを見事に表出している。

ところで、江漢が描いた多くの七里ヶ浜図には、遠景の富士が江の島の左に描かれるものと、本図のように右側、小動（こゆるぎ）岬の断崖の向こうに描かれるものとの二種類に大別できる。実際の風景は本図のような配置であり、本図は写生をもとに正確に描かれた実景に近い図、他方は海岸線の美しい湾曲を強調するために富士山の位置を変え、より美しさと雄大さを表出したものであろうと考えられる。

なお、本作品の伝来については、現在までに詳らかでない。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

名所絵から風景画へ――情景との対話

三の丸尚蔵館展覧会図録No.76

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十九年三月二十五日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan